

## 小学生課題① 「真」しん

(解説) 頼山陽の座右の銘は「真率」しんそつという言葉です。

「真率」とは「自分を飾らないこと」「正直でさっぱりしたこと」という意味です。山陽は人と接する時には、いつもこの言葉を忘れないように気をつけていました。また、山陽が弟子たちに漢詩を教えるのに、最も大事なものとして説いたのが「真」の一字で、真似をすることや嘘くさいことを厳しく戒めました。

## 小学生課題② 「忠孝」ちゅうこう

(解説) 安永九年(一七八〇)十二月二十七日に大阪で生まれた頼山陽は、翌年、

祖父の惟清ただすがから「忠孝」の二字を書いた書をお願いします。その書は守り袋まもぶくろに入れられ、山陽は生涯しょうがいそれをお守りとして肌身離さず持っていました。そのため、山陽が亡くなった時には、字が消えかかっていました。その後、文字の輪郭だけを写し取った複製ふくせいが作られました。

## 中学生課題① 「山紫水明」

さんしすいめい

(解説) 文化十一年(一八一四)十月、鞆の浦(現在の福山市鞆町)を訪れた頼山陽は、鞆の商人大坂屋が所有する建物について文章(漢文)を書くように頼まれました。その建物が仙酔島を真正面に望んでいることから、山陽はそれを「対仙酔楼」と名づけました。その文章の最後には「山紫水明」という言葉が登場します。

「山紫水明」とは「自然の景観が澄みきって美しいこと」を意味する四字熟語で、頼山陽が作った言葉です。鞆で書かれたのが最初といわれています。

## 中学生課題② 「浩然之氣」

こうぜんのき

(解説) 「浩然の氣」とは天地間に充滿している至大至剛(この上なく大きく、この上なく強いさま)の元氣(万物生成の根本となる精氣)のこと。行いが道義(人の行うべき正しい道)にかない、心に恥ずることがなければ、その身に生じてどんな困難に有っても決してくじけないといわれています。

中国戦国時代の思想家・孟子(前三七二頃〜前二八九)の言行や思想をまとめた『孟子』に「我れ善く吾が浩然の氣を養う」という一節があります。

頼山陽が好んだ言葉で、これを書いた一行書も残しています。



ただしんゆえにしん

## 中学生課題③ 「唯真故新」

頼山陽は、詩文を教えるのに、最も肝要な点を「真」の一字と「唯真故新」の四字で説き、模擬(真似をすること)や虚偽(嘘偽り)ということを厳しく戒めました。

# 高校生課題①「癸丑歳偶作」より四句

(解説)

頼山陽が十四歳の時に詠んだとされる詩の中の四句。詩集『山陽詩鈔』の冒頭に収録されています。

十有三春秋

じゅうゆうさん しゆんじゆう  
十有三の春秋

逝者已如水

ゆ もの すで みず  
逝く者は已に水の如し

天地無始終

てんち ししゆうな  
天地 始終無く

人生有生死

じんせい せいしあ  
人生 生死有り

安得類古人

いずく こじん るい  
安んぞ古人に類して

千載列青史

せんざい せいし れつ  
千載 青史に列するを得ん

(大意)

十三年の歳月が過ぎ去った。

水が流れるように過ぎ去って戻らない歳月。

始めも終わりもない宇宙(時間)にくらべて、人間には生死の定めがある。

どうか、いにしへの聖賢(聖人・賢人)のように、永久に歴史書に記される

ような人物になりたいものだ。

## 高校生課題② 「不識庵 機山を撃つふしきあん きざん うの図ずに題すだい」

(解説)

「不識庵機山を撃つふしきあん きざんの図ずに題すだい」という七言絶句です。

上杉謙信うえすぎけんしん(不識庵と号す)と武田信玄たけだしんげん(機山と号す)が死闘しとうを繰り広げた

川中島の合戦かわなかじま かつせんを詠よんだ詩しです。詩吟でもしばしば詠じられ、山陽の詩のなかでは最も有名な作品です。

鞭聲べんせい肅々しゆくしゆく夜過よる河かわ  
曉見あかつき千兵せんべい擁大牙たいが  
遺恨いこん十年じゅうねん磨一劍いっけん  
流星りゅうせい光底こうてい逸長蛇いっ

鞭聲べんせい肅々しゆくしゆく夜過よる河かわを過わたる

曉あかつきに見るみ千兵せんべいの大牙たいがを擁ようするを

遺恨いこんなり十年じゅうねん一劍いっけんを磨みがき

流星りゅうせい光底こうてい長蛇ちやうだを逸いっす

(大意)

(上杉勢は)鞭むちの音も静やいかに、夜陰やいんに乗じて河を渡った。

明け方たいしやうばたになって、大将旗たいしやうはたを押し立てた数多の軍勢が(武田勢の)眼前がんぜんに現れた。

(上杉謙信は)十年間研ぎ澄すました一劍いっけんを提ひげて敵陣てきじんに切り込み、打ち下ろした剣光けんこうが流星りゅうせいの如ごとく一閃いっせんしたが、無念むねんにも強敵きやうてき(武田信玄)を取り逃にがしてしまった。

# 高校生課題③ 「郷きょうに到いたる」

(解説)

文政八年(一八二五)十月六日、頼山陽(当時四十六歳)が京都から広島に帰省し、広島城下東端の猿猴橋えんこうばしにさしかかった時に作った詩です。頼山陽は母を想う詩を数多く残しています。本作では母を想う素直な心情が飾ることなく表現されています。

猴子橋頭生暮煙  
已看兩岸市燈懸  
同人莫恠吾行疾  
欲及萱堂未就眠

猴子橋頭 暮煙 生じ

已すでに看みる 兩岸 市燈りょうがんの懸しとうるを

同人 恠あやしむ莫なかれ 吾わが行こうの疾はやきを

萱堂けんどう 未いまだ眠ねむりに就つかざるに及およばんと欲ほつす

(大意)

猿猴橋えんこうばしのたもとには夕もやが生じ、すでに兩岸には街灯がともっているのが見える。

同行の人よ、私の足どりが早いのを怪しまないで欲しい。母が眠りにつかないうちに家に着きたいのだ。

高校生臨書課題① 「外史脱稿戯作 修史偶題十一首之一」

(解説)

頼山陽が歴史書『日本外史』編纂の感想を詠んだ七言絶句十一首の内の一  
一首です。文政十年(一八二七)、四十八歳の作とされています。

歴史書の執筆に心血を注いだ山陽の心情が伝わってきます。

二十餘年成我書

二十餘年 我が書を成す

書前酌酒一掀鬚

書前酒を酌いで 一たび鬚を掀ぐ

此中幾個英雄漢

此の中の幾個の英雄漢

諒得吾無曲筆無

吾が曲筆無きを 諒得するや無や

(大意)

二十餘年の歳月を費やして『日本外史』は完成した。

この書を前に、酒を注いで神靈を祀り、心ゆくまで杯を傾けた。

この書の中には幾多の英雄たちを描き出しているが、彼らは私の筆に曲筆

(事実を曲げて書くこと)のないことをわかってくれるだろうか。

## 高校生臨書課題② 「修史偶題」

(解説)

これも、頼山陽が歴史書『日本外史』編纂へんさんの感想を詠んだ七言絶句十一首の内の一首です。一人で史書を書き上げた山陽の自負が伝わってきます。

三十萬言皆血痕

さんじゅうまんげん みなけっこん  
三十萬言 皆血痕

鎧光劍氣錯成文

がいこう けんき まじ ぶん な  
鎧光 劍氣 錯りて文を成す

保元寫徹慶長尾

ほうげん うつ けいちょう おわりいた  
保元より写し 慶長の尾徹る

自覺筆端生瑞雲

おのづか おぼ ひつたん ずいうんじょう  
自ら覚ゆ 筆端に瑞雲生ずるを

(大意)

日本外史三十余万言。一字一字皆血痕を帯びており、鎧の発する光と劍の殺氣が入り混じって文を成している。

源平の時代から筆を起こし、江戸時代の草創期、慶長の末に至ると、筆の端に太平の世の空気が漂うのを覚える。